

まびときたる
まち

Machibito Kitaru
今回のテーマ
ひろく

自分たちの暮らし やすいまちに

自分の暮らすまちだから、暮らしやすいまちであってほしい。「港町宇品共和国」は、こんな思いからスタートしたNPO。地元との接点をつくりたい、楽しく生活できる宇品であってほしいという気持ちを持つ人々が集まり、昭和58年（1983年）ごろ、宇品商店街のまちおこしの話が持ち上がりました。藤原さんが中心となって始めた活動は、いつの間にか大きくなり、昭和63年（1988年）7月24日「港町宇品共和国」が建国されたのです。すべてが手弁当のボランティアで始まった共和国。ウォークラリーやゴル

地域発

NPO法人 港町宇品共和国

世界にひろく
まちづくり

港町宇品は
えんとこヨ！



代表の藤原隆雄さん

フ大会など、商店街やほかのボランティア団体を巻き込んで、さまざまな活動を続けてきました。各地のイベントを視察し、自分たちの活動に生かしたこともあります。小学校唱歌にも歌われた広島島の港町宇品をもっと元気にしようという思いから、平成2年（1990年）には「宇品港物語」を企画運営。宇品界隈においてコンサートや難民救済医療キャンペーンなどのイベントを開催しました。

また昨年から、宇品という港町の特性を生かし、宇品港に入港する外国船の乗客をもてなそうと、インフォメーションセンターを開設。観光案内ボランティアや歓迎イベントの開催などを行ってきました。

共和国の活動理念は「自分のために、



インフォメーションセンターを開設し、外国人客を出迎えました



昨年4月、宇品の1万トンバースに外国船が入港



第12回「みんなきんさいヒューマンビーチ長瀬!!」には、約280人が参加しました(昨年8月)



NPO法人として生まれ変わる

やりたいと思ったことをやる」という考えです。自分の夢をいろいろな人に語り、それを実現させるために頑張る気持ちで、10年にわたる活動を支えているのです。

ボランティア活動というのは、楽しいことばかりではありません。週末ごとにイベントが続くと、自分自身の時間がなかなかとれない、という悩みも生まれます。次第にメンバーが減っていく、このままではいけないと思った藤原さんは「港町宇品共和国」をNPO法人にすることに決めました。

NPOは、社会的な活動をする民間の非営利組織のこと。法人となったからには、しっかりと責任を持たなければなりません。藤原さんは、「NPOになってから、ボランティア感覚を捨てました。収益がないと活動ができないということ、はつきり意識するようになったんです。補助金をたくさんもらっているのだからという人もいますが、そんなことはありません。金銭的にも精神的にも自立して活動ができるように、意識改革をしていきました」と熱っぽく語ります。

共和国の活動の中で、特に高い評価を得ているのが、「みんなきんさい

情報を発信し続ける

ヒューマンビーチ長瀬!!」です。これは、作業所の仲間と学生や社会人ボランティアと一緒に海水浴に行くというイベント。今年で13回目になります。作業所の皆さんとボランティアが協力して、海水浴やスイカ割りを楽しみます。昨年は観音高校サッカー部の生徒も参加し、地域・企業・学校を巻き込んだ大きな取り組みに発展しています。

地元に着した活動を行うには、たくさんの情報収集・提供が必要になります。その情報発信基地として活躍するのが、情報紙「やじうま情報局」で



情報紙「やじうま情報局」

「やじうま情報局」に掲載される情報は、共和国事務所の軒先にあるこのポストに集まります

す。3年ほど前に創刊し、隔月発行でこれまでに27号まで発信されています。しかも、発行部数は毎回1万8千部と圧巻。中国新聞と朝日新聞に折り込まれ、宇品・島しょ部・丹那の一部地域に配布されています。

紙面には商店街の情報やイベント告知、編集長である藤原さんの近況報告や地域住民の声など、元気のでる情報が満載で、地元の人に喜ばれています。

さまざまなアイデアを実践し続ける港町宇品共和国にとって、事業に適した人材を集め、体制を整えるのがこれからの課題。活動の枠はどんどん広がっていき

NPO法人 港町宇品共和国

〒734-0004
広島市南区宇品神田5-20-14
タカオビル2F
TEL 082-250-5722
FAX 082-255-1885
E-mail st-takao@hikat.ne.jp
<http://www.hikat.ne.jp/home/st-takao/homepage/bayside01.htm>



写真家でもある藤原さんは、広島の魅力伝える絵はがきを作製・販売し、NPO法人の資金源として役立っています



上/2,600人の乗客・乗員を乗せて宇品港に來航した「オーロラ号」
右/着物や骨とう品が並びます



最新レポート

ハッピーポート in ひろしま ～宇品港物語～

好天に恵まれた3月2日(日)、宇品港にワールドクルーズ船「オーロラ号」が初來航しました。この豪華客船は1月にイギリスを出発し、3カ月掛けて世界を一周しているのですが、その航海の途中で宇品港に立ち寄ったのです。当日は、午前8時から午後6時まで10時間停泊。その間、乗客・乗員と市民を合わせて1万5,000人もの人々が、宇品港に集まりました。

さまざまな国から訪れた乗船客らに広島を知ってもらうとともに、地元の人たちの国際交流の架け橋になればと、NPO法人「港町宇品共和国」は、宇品港1万トンプースで「ハッピーポートinひろしま～宇品港物語～」を開催しました。これは、今まで行ってきたインフォメーションセンターの開設を發展させた、実践的なイベント。当日の様子を、会場の全ブース責任者として活躍した河川知明さん(こうぐちともあき)に伺いました。



河川さん(左)は、藤原さんの活動に共感してこのイベントに参加しました

宇品港物語のテーマは？

ずばり「イギリスと広島共通項」です。イギリスは海洋王国であり自動車大国です。それは広島もよく似ています。その共通項を最大限に生かそうと、クラシックカー55台を展示。イギリスは島国ですから、海とはなじみが深い。海を楽しんでもらうためにジェットスキー・ショーを開催するなど、「広島海」をアピールしました。

あとは「和」と「街」。日本を感じてもらうために、和小物や和服の展示販売をするブースを募りました。これは古美術商や骨とう品屋の方々に声を掛けたんですが、着物やひな人形などは、外国の方に人気でした。街を表現するのは食ですから、広島食のブースも一緒に。店員さんが着物で対応しているブースもあり、とても日本らしく広島らしい会場になったと思います。

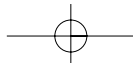
地域発
NPO法人 港町宇品共和国
世界にひろく
まちづくり

インフォメーションセンター
は、いかがでしたか？



世代を超えて人気がある年代物のクラシックカー

今回はこれまでのインフォメーションセンターの取り組みを広げ、広島外語専門学校(中区)や広島コンピュター専門学校(西区)の学生の皆さんにも呼び掛け、500名のボランティア参加がありました。インフォメーションセンターでは、学生たちによる英語の観光案内やマップの配布などを行いました。また、希望する外国人には着物の着付けサービスや、ポラロイドカメラによる撮影も行い、広島に來たよい記念にもらえたと思っています。このほかに、インターネットサービスや絵はがきの展示販売も好評でした。センター内のミニステージでは篠笛や民謡の演奏も行い、外国人客だけでなく地元の人にも楽しんでもらえたようです。



ひろしままちづくりフォーラム2003
～持続するまちづくりの新たな仕組みを考える～

新しい公共 —「私」を社会にひらく

基調講演

地域の生活・文化を育む “市民まちづくり”と“新しい公共” 講師 林泰義さん

ピッツバーグに
見る“新しい公
共”のスタイル

■プロフィール
(株)計画技術研究所所長。1991年にNPO法人「玉川まちづくりファンド」を設立。現在は同運営委員、世田谷まちづくりファンド運営委員など、全国各地のまちづくり活動を支援している。

「新しい公共」というのは、公共の分野に行政だけでなく、住民やNPO、企業などが、それぞれの立場でまちへの関わりを紡ぎ、自ら持つものを社会に開く、そしてそれぞれの主体が互いに力を合わせて担う、ということが基本的なスタイルなんです。

アメリカはNPO活動が大変進んでいます。例えば、ピッツバーグという都市では、企業や行政が採算性の問題から手を付けられないでいた、オハイオ川流域の街の再開発をNPOが主体となって乗り出しています。総事業費に約20億ドルのお金が掛かったのですが、具体的なまちづくり案を示し、市議会に提案して7億ドルから8億ドルを負担してもらい、財団から毎年5億ドル、それ以外にも民間の投資などと呼ばび込みました。日本の場合だと、行政が大再開発を計画し、デベロッパーが行う、というたぐいのプロジェクトが、主体もお金の流れも全く違う形で現実に動いているのです。



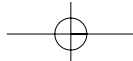
ピッツバーグの例を採り上げて講演する林所長

平成15年（2003年）2月15日、
「持続するまちづくりの新たな仕組みを考える」をテーマに、市民活動団体のメンバーや行政関係者、学識経験者など総勢160人を巻き込んだ、「ひろしま まちづくりフォーラム2003」がまちづくり市民交流プラザで開催されました。

主催したのは、広島県建築士会広島支部や日本建築学会中国支部、市民交流プラザなどで構成する、ひろしままちづくりフォーラム実行委員会（宮迫

勇次委員長）。

前半は、全国のまちづくりのコンサルタント業務に携わる、計画技術研究所の林泰義所長による基調講演の後、広島でまちづくり活動を行う4人の市民活動家の事例などを聞きました。後半は、事例発表を受けた林所長による応答講演、さらに160人の参加者全員によるワークショップが行われ、新しい公共、コミュニティ・ビジネスといった観点から、持続・循環が可能なまちづくりの仕組みを探りました。



ディスカッション ワークショップ

講演、事例発表を受け、ワークショップを実施。講演と事例発表から導き出された、それぞれの課題や提案、情報などをポストイットに記入し、それを張り出しておのディスカッション。従来のグループ討論型でなく、160人全員が一つになって進める、新しいワークショップスタイルです。課題を5つに絞り、熱い議論が展開されました。



講演、事例発表から5つの課題が



今回のフォーラムで導き出された「協働の図」

応答講演

“新しい公共”と ひろしまのまちづくり

講師 林泰義さん

本来の「公共」は、行政だけのものではありません。これからの形は、いろいろな立場の人が「私」を開いて、新しい公共のメンバーになることがポイントです。新しい公共は、さまざまな主体が得意分野を社会資源として提供し、それをいかに活用するかが重要です。それと同時に、出てきた社会資源を有効に使えるような

私は皆さん誰でも公共に参加することができると考えています。「私」という字と「公」という字に注目してください。私という字は、へんが稲、つくりが腕、つまり稲を抱え込んでいっているという意味があるそうです。また公という字は、腕を開くという意味があるんです。つまり、私が持っている稲をみんなで食べましようという開くこと、私の中に持っているものをみんなに開くことで、公共に参加したことになるんです。



ひろしまの まちづくり活動事例

1 歴史資源の掘り起こしと 活用の展望と課題

草津まちづくりの会
山根 政則さん

草津町づくりの会では、昨年から今年にかけて「1000年歴史草津まちIT博物館」を立ち上げた。このままではまちの貴重な建造物が消える、歴史資料が散逸する、歴史を子孫に伝えられないということから、貴重な歴史を共有情報として集め、CD-ROMを作製して広島中に配ろうと考えている。

今後の課題は、人材をどうやって集めるか、財政基盤をどうするか。また、草津はマンションが多いので、転入者への参加の呼び掛けと活動浸透、そして歴史資料の散逸阻止を図りたい。



2 まちづかい・行政付き合いの 展望と課題

千田わっしょい祭実行委員会
山根 進さん

千田わっしょい祭実行委員会の活動目的は、広島大学跡地の早期有効活用と公共空間の活用推進。千田わっしょい祭とは、広島大学の学生とともに、11月にある大学跡地の3割分に当たる東千田公園で、毎月1回開催している大学祭の市民祭。コンサートや文化事業、フリーマーケットを行っており、毎回2万人の人数でにぎわっている。

課題は、公共空間をいかに自由に誰もが活用できるようにすること。公園だけでなく、川岸や緑地帯なども含む公共空間を市民の楽しめるコミュニティ・ビジネスの場として、活動ができればと思う。



市民主導のまちづくりの 展望と課題

可部カラスの会
新澤 孝重さん

地域の環境美化や文化継承などの活動を行う可部カラスの会。会費を徴収していないので、主な収入源は、いろいろな所で行う講師活動によるもの。

最近では、ようやく地域で認知され始めてきたが、その要因は、①会報の発行②昔のまちの様子が分かる写真約1300枚を集めた写真展の開催③出前講座の実施④電子メールやファクスを使った会員メンバー間の情報交流の徹底⑤地域住民のボランティアへの理解促進の5つ。

今後の課題は、地域の各種団体と横のつながりを深めること。もう一つは拠点づくり。いろいろな人が出入りでき、情報の受発信、連携が図れる拠点の必要性を感じている。



商店街における 環境美化の展望と課題

コイン通り街づくり委員会
石田 邦夫さん

コイン通り街づくり委員会は、メンバーがそれぞれ花俱樂部などの個別グループをつくり、活動をしている。

花俱樂部の活動は、コイン通りにあるアンズの木78本、花ミズキ45本、そして126カ所ある花壇の管理。この花壇にサルビア、マリーゴールドなど、2,000株を植えたのが活動の始まり。

コイン通り周辺で開催される5つの祭りのうち、花俱樂部が取り組んでいるのが、桜パレード、アンズ収穫祭、金持ち祭り。この時行なうバザーの収益を活動費に充てている。また、春の小川復活作戦と題して、五日市中学校の生徒と一緒に、ドジョウ、メダカ、沼エビなどを放流するといった活動も行っている。



現在の課題は、活動資金の確保と人材の確保である。



3人ならぬ160人
よれば文殊の知恵

課題

対策

- ①活動拠点の確保→・商店街の空き店舗活用
・公民館の活用
・高齢化社会に伴う空き家の活用
・ビル単位の規模で拠点づくり
・使われていない公共施設を活用 など
- ②新規人材の確保→・大学など教育関係との連携
・定年退職者を確保し、そのノウハウを活用
・若者が集まる場所でイベントを実施し、巻き込む
・企業のボランティア時間の導入 など
- ③公共空間の有効活用→・公園のような大規模の公共空間だけでなく、河川敷、道路脇の空き地なども活用
・公共と公益性の理解 など
- ④活動資金の確保→・特産品をつくり商店街で販売してもらうなど地域の団体を活動に巻き込む
・企画力をつけることで、活動資金、人材を惹き付ける など
- ⑤市民主体のまちづくりのしくみと体制づくり→・まちづくりの窓口をつくる
・各種団体が活動内容を話し合う会議を定期的に設ける

■「市民参加」から「行政参加」の時代へ

これからのまちづくりは、行政の取り組みに市民が参加・参画するという流れでなく、市民の取り組みに行政が参加・参画するというような、市民が自由に動いていく流れにすることが重要です。そして、市民主体の協働を行っていく必要があります。

このフォーラムは今後も実施していく予定です。まちづくりの大きな動きが見られ始める広島、今後の動向に注目です。

図 新しい公共



の経済なのです。

千田わっしよい祭実行委員会を例にとりましょう。広島大学跡地の11％とは大変なスケールなんです。普通の市街地に換算すると、1％に約100所帯が住めます。この所帯の平均的な年間所得を500万円とすると、全体では毎年5億円の経済活動が行われていることとなります。つまり、11％で計算すると、毎年55億円もの経済活動が滞っていることになります。都市の経済は損をしているわけです。こういう経済の観念は、まちづくりを考える時には重要な要素です。これからのまちづくりには都市経営、コミュニケーション・ビジネスという考え方が必要なんです。まちづくりとは、すなわち地域の

ネットワークや組織などをつくらなければなりません。これが社会資本です。ハードは社会資本ではありません。ハードはソフトがないと機能しないわけですから。(図参照)